

七つ峰鉾山調査紀行

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-08-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤田, 朝生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00005938

七つ峰鉾山調査紀行

三年 藤田朝生

去る10月13日から15日まで3日間七つ峰鉾山へ行くルートと七つ峰鉾山の第一回地質調査が行われた。七つ峰鉾山は志太郡栗川根村七つ峰(1533.2m)の西側山腹にある。この地帯の地質は三倉層に属していて火成活動の殆んど知られていない層だけに、こゝに鉾床のあることは興味のあるところである。又静岡市から七つ峰へ行くコースは瀬戸川層と三倉層を横断することにおいて興味あるコースであった。以下そのルートマップをのぞいてみることにする。

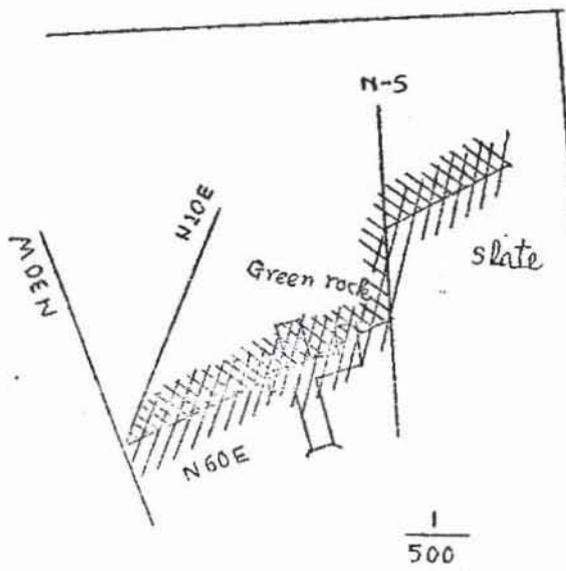
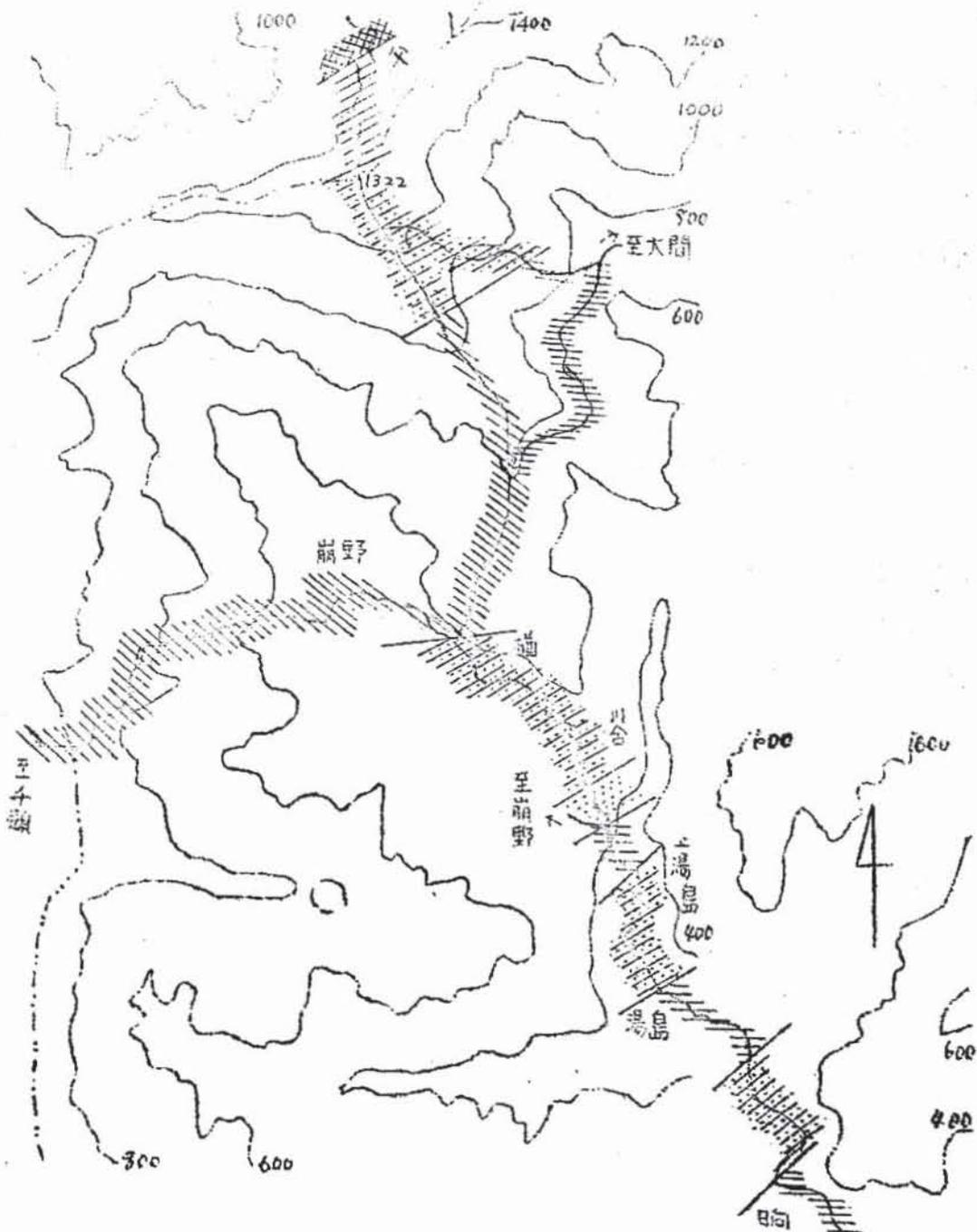
10月13日10時25分静岡発日向行のバスに乗り、オ1日のルートに入った。日向行ではあるが台風による山崩れのため、その手前約5kmの小島までとの争であった。バスは戦時型の化粧のはがれたみにくい箱で甚しくゆれる。道路もかなり悪いらしい。バスは葛科川に沿って北上する。道のせまさと時おりせまる山肌が気になる。谷津を通過して眼の前に新しい山崩れがみえた。乗客がたの下に家が二軒埋まっていますよと教えてくれた。この辺から山はせまり谷は蛇行の徴候をおびてくる。吉の本部落をすぎると前方に環流丘陵がみえた。バスは旧河床の上を走って行く。11時45分小島に着いた。前の車が更に奥まで行ったので乗客にせがまれて運転手は車を又走らせた。結局坂の上の南方約1kmの地点で下車した。そのとき11時50分路ばたで谷川を眺めながら食争をすませ、12時20分ハンマーとクリノメーターを手にし、いよいよルートマップを握きながら出発した。この附近は頁岩で軽い変成作用をうけているらしくよくはがれ千枚岩質である。走向はN20°~30°Eで傾斜は西落である。坂の上部落の南方約200mの山崩れの現場から和田部落までは露出が悪く露頭調査はできなかつた。坂の上部落はやく広い洪積台地の上に分布している。段丘上に点存する和田部落の北端から露出がよくなる。頁岩で走向はN30°~40°E西へ凡そ45°で落ちている。小島附

近から日向附近まで切りくずされた崖に褶曲構造がみられる。日向附近も頁岩で、これに接し北方には砂泥互層が分布している。湯島南方約1 Kmの地奥に典型的な環流丘陵があった。川の水面上から約6 m高い段丘と10 m高い旧河床とが突に整然として段をつくり小さい規模ながら隆起と浸蝕とを示す模式的地形である。

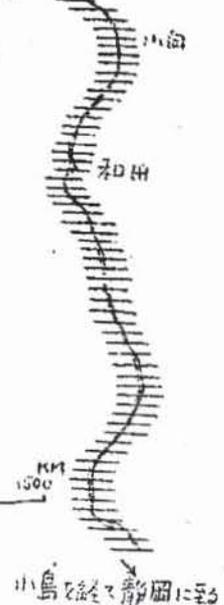
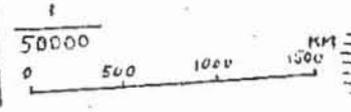
2時40分、湯島につき休憩。3時出発。この附近は砂岩頁岩の互層であるが上湯島北方約1.5 Kmから崩野へ至る分岐点までは黒色頁岩が露出している。その走向はN20°E、傾斜は40°Wである分岐点から川合部落の南端までは砂岩が分布する。川合部落南端からはまた砂泥互層となるが露出はよくない。山のグラグラ坂をクネクネ曲りながら登りつめた時眼前は急に視野がひらけた。赤や青のトタン屋根の樺尾部落がコンニャク畑の中にかんではいる。かねて予定していた宿所についた。本日の徒步行程は凡そ10 Kmだった。一行は風呂でつかれをなおし、山の幸にささうって明日への鋭気を養った。10月14日8時出発。樺尾から崩野へ通ずる山道のわかれの辺から粘板岩が露出している。大間への分岐点から北は全く露出が悪い。山道をクネクネ曲って広い草原に出た。そこにこじんまりとした珈琲小屋が一軒だけある。鉾山まで凡そ2.5 Kmあるが、ここから毎日通うのだそうである。人里離れた大自然との生活一種の交着を感ずる。素朴神秘静寂が小さな壺立小屋に充満している。そこから50 mばかり登ると尾根に出る。東の大河内達山のかなた、真富士の姿がすみきった空にそびえてすばらしい。しばらくこの絶景にみとれていた。これからは尾根づたいに登り、天狗石山、セツ峰を連ねる尾根の峠(1322 m)に出る。大間分岐点の北凡そ2 Kmの地奥あたりから砂泥互層が1322 mの峠まで分布している。この峠から鉾山まで露出はすべて粘板岩でそのうちにレンズ状の石英を包んで *Augen structure* を示している。山の中腹をいくつかの小さな谷川をわたってクネクネと曲り、11時30分鉾山の現場に着く。現場はこの粘板岩と緑色岩(輝緑岩)との接触帯にあたる。鉾山といっても探鉱坑道を10数回掘進したばかりのごく小規模の現場である。鉾床はN60°Eの断層線にそって粘板岩と緑色岩との接触帯にあり、鉾石はレンズ状に含銅硫化鉄鉾で銅の含有量は比較的多く斑銅鉾勝ちの色彩を呈している。その附近は炭酸塩化作用が著しく岩石は方解石の細脈が網状に走っている。13時30分調査を終了帰途につく。その途次大間部落の北にある樺尾の滝の遠望を志し1322 m峠から迂回したが6時30分カンテラの灯をたよりに帰着した。11月15日8時出発。崩野から智着山峠へ向う。峠まで露出悪く調査は全く行えなかった。11時峠につく。11時30分一路牛頭をさして下る。前回とはちがって規模の小さい風景が展開する。谷の水

(12)

はかなり豊饒でいたるところにわさび沢がある。15時千頭に着く。とたんに雑然とした下界へ放り出された気分になる。大井川奥のダム発電工事で急に都会色化し、今時代の脚光を浴びて。ペンキで塗りたてた家や店先、さては屋根瓦すべてが色の濫用に見え蒸着きのない町風勢に打たれ、今までの山路の旅が一そう名残りおしくなる。15時30分、三日間のつかれと調査終了の安緒とを共にして平中の人となった。さて調査結果をふりかえってながめると、瀬戸川層と三倉層との境はまだはっきりしないが岩相の变化からみて日向附近であろう。瀬戸川層には頁岩が分布し、三倉層には砂泥互層と粘板岩が分布する。全体を通して砂岩の厚い層はない。砂泥互層は一般にわずか20 cm以下である。北にすすむほど地層は変成作用を受けて粘板岩が広範囲に分布している。その中の緑色岩との接触帯に硫化銅鉱床がある。規模の大きい鉱床を希望するには三倉層の性質上無理であろう。模型的の規模であるにしてもその存在と鉱床の性質とは参考になるものが少くない。



-  粘板岩 (眼球状構造)
-  粘板岩
-  砂泥互層
-  砂岩
-  綠色岩
-  頁岩



小島を越えて和州に至る